

原爆映画 作られた

©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室



「新型爆弾」投下

一九六〇・一一（「日本」）

クネーベル・ベイリーの「高地なし」を脱むと原子爆弾を日本の都市に投下するという決定がされるまで、アメリカの軍部の間で賛否両論がかなりはげしくたたかわされたことがわかるが、当の日本にとってはまったく耳に水の原爆攻撃であった。

八月六日、広島が見えるかす荒野となったとき、大本営発表は敵軍が「新型爆弾」を投下してわが方に「相当の被害」があったと放送し、この「新型爆弾」から完全に身をまもるには白い衣服を着ればよいと伝えた。味方の損害をかくしたり、無視したりする大本営発表のいつもの手口でもあったが、また日本の戦争指導者たちが原爆などまだ夢にも想像していなかったことをこれ

は正直に白状している。三日後に、長崎がほろびた。日本軍もついにこれがウラニウムあるいはプルトニウムの核分裂を利用したおどろくべき原子兵器であることを認めざるをえなかった。

そのころ、日本にはニュース映画会社はたゞ一社しかなかった。軍の統制、いわゆる映画界の検閲体制によって一つに絞られた国策会社、社団法人日本映画社である。それは文字通りの官報ニュース、軍用ニュースであった。すでに戦艦を間近にひかえ、爆撃による全面的破壊によって、アメリカ空軍のある司令官の報告の用語をかりれば「石器時代に逆もどりして」いたところの日本で、この会社のカメラマンは、もう何も写しとるものもなくなつて、ただ写すに、本土上空でB29に体あたりする爆撃の瞬間の姿をとらえようと、望遠レンズを空にむけるだけだった。

イスとして戦後の国民に見せてきた日本映画社であったが、社員の手でこれがいいと思つていたわけではなかった。彼らの間にも、戦争の目的や、日本の前途などについての疑問や反省があった。真実を、そして真実だけを報道したいという痛切な願ひもあった。そして、この反省、この願ひが、ついに発音する機会が来た。

日本映画社の若いスタッフたちは、いち早く軍報道部から「新型爆弾」がまだいらない驚異の新兵器原子爆弾であるという情報を入手して、報道者としての良心をためす時が来たと思つた。現地から伝えられてくる報告は、一報ごとに凄惨さをましてくる。想像を絶する破壊、しかもそれが不動の事実であるとすれば、これは人類の歴史の転回点である。これをカメラマンに記さないで、どこにニュースの使命があるだろう。だが、これをカバーするのには、彼らはまさに「石器時代」的の手段しか持っていなかった。

リュックをしょって

鉄道は寸断されていた。食糧はなかった。いちばんかんじんのフィルムさえ不足がちであった。こういう中で、まず演劇家の伊藤（現姓井上）海野野君が、ヤミ米を買いあつめたリュックをしょつて、長崎へ先発した。多くの演出家やカメラマンが、一人一人、広島へまた長崎へと続いた。

岩崎 昶



原爆の災害のほんとうの大きさを深さはまだ知られていなかった。が、放射能による害があることはわかつていた。広島、長崎では、七十五年間は草木は生えないという噂であった。その中へ撮影班は入つていかなければならなかった。

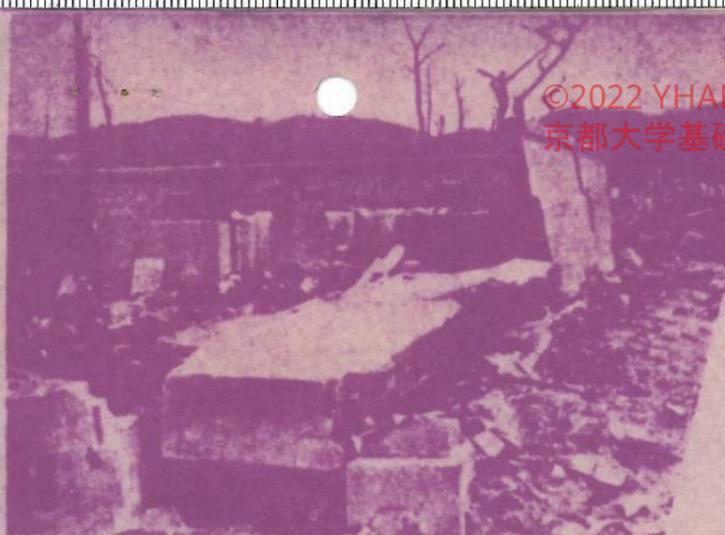
ある班員は新幹線やはやの妻君と木さかずきをして出発した。この時のスタッフの中からはたゞ一人の原爆症被害者も出していないのはさいわいである。それは実際の撮影が、原爆投下の日から三週間ほどを経てのちによりやく開始された、という石器時代の諸条件のせいであった。が、そのことはまた残念にも、被爆直後の燃えたる原子のルツボと、そこに焼け亡びる人間のうめきとをフィルムにとどめることを不可能にもした。

日本映画社の撮影班を導くようにして、日本の科学陣も動員した。それは理研の仁科芳雄博士を中心として、若い原子科学者、医学者、生物学者、地質学者

c092-009-025

埋め

日本の映画人が作った広島長崎の原爆記録映画が、どのようにして日本からうばわれ、世界の眼からかくされ、いまだに闇に埋もれているか、というこれは記録である。



などで編成された「原子爆弾被害調査研究特別委員会」の調査隊であった。キヤノン、スタッフと科学者、この二つのグループは、原子野の廃墟の中で、自然行ともなし、さいわいにも、この映画は日本最高の頭脳たちによって、直接の指導を受けることになった。

山崎文男、杉本朝雄、田島英三、玉木英彦、宮崎友喜雄、などの仁科門下の若い研究者、それに医学関係では、都築正男、そのほか、すべて十五年後の今ではそれぞれの分野で大家となっている科学者が、こうしてこの映画の学術スタッフとなった。

撮影はえんえんと続いた。物理班の学者とキヤノン・スタッフは市内のどこどこ原爆の照射によって石造の建物に焼きつけられた影の角度を集めて、爆心となった地点を求めたり、熱や爆風の強さを測る。生物班は、畑の芋の根や、土の中のみみずがガイガー・カウンターの音を、建築土木班は爆心から一キロごとの同心円を描いて、建造物の破壊と抵抗との状況をフィルムにおさめる。

医学班は——この班はなんといってもいちばんむごたらしい場面の日撃者とならざるをえなかった。全身の皮膚をたらりとぶら下げて、男や女が幽鬼のようにさまよい、水を求めて川べにおり重なってたおれていったというような日々はもうとうに過ぎていたが、日赤病院をはじめ

め、爆心からいくらかはなれていて、鉄筋建築だったためにかなりな損害はうけながらも倒壊をまぬがれていた小学校などには、重傷者や重症者がすき間なく枕をならべ、収容しきれない人たちは、土間にムシロをひいた上に無情にころがされてうめき声をあげ、来る日も来る日も、あとからあとからと死んでいった。

地上はじめての原爆による傷病にたいして、日本の医学が解答を持っていよう

はずはなかったし、かりに解答を持っていたとしても、医療の材料も手段もなかつた。全身的な火傷にたいしても、アエドレーフが何か白い軟膏の塗布、創傷にたいしては赤いマキキョロ。まずはとんどそれ位である。気休めにもならないうこの程度の手当さえついに受けられず息をひきとっていった人も多かった。

この時、この映画におさめられた患者のほとんどはその後あまり長く生きのびることはできなかった。



撮影を禁止する！

アンダーシャツ一枚、スフのポロポロの半ズボン、というような当時の日本人一般の衣食のようないでたちで、スタッフの人たちは、みなでフィルムや機材をのせた大八車——自動車などはむろんなかった。「石器時代」である——を機おしながら、焦げた瓦礫の街をあるきまわっているうちに、いつかつめた秋風が吹きまくり、霜の近づくのがわかった。

十月の末、だいたいの撮影が終わって、広島班が長崎に合流したとき、米軍が長崎にも進駐してきて、市中をパトロールするMPが、アイモを抱えた乞食のような日本人の一隊を見とがめて、事情を調べあげるとともに、東京のマップカーサーの総司令部に報告した。総司令部は折り

返し長崎に指令して、撮影隊をただちに東京に護送させた。まるで戦犯あつかいであつた。

そして、私が総司令部によび出されることになった。私が、この少し前から、日本映画社の改組（戦争中の組織である社団法人から、戦後の株式会社へ）にもなつて、これに入社し、製作局長の職についていたからである。したがって、この原爆記録映画のジョネラル・プロデューサーとして（製作の直接指揮は、記録映画部長の加納竜一君であつた）、司令部と折衝するのが私の任務となつたのである。

総司令部のG2（幕僚第二課）が相手であつた。いかにもアメリカ軍閥という

が、それが現地から送られ、現像され、そのラッシュをアマサところを人写して見るのが、私や加納君、伊藤君などの仕事であった。

私は当時日映のニュース「日本ニュース」の責任者でもあって、一日もデスクを離れることができなかったから、ついに島にも長崎にも実地に足を踏み入れることとなり、終つたが、それでいて、この何れかについて日本ではいざいざ詳しく一人となつた。私だけではない。

私たちがスタッフはその画面の強烈なうたをまるで憑かれたようになつていた。その次の日、米軍は約束どおり、ジーエスをもってフィルムを引き取りに来た。私を連れて行った。その上、もはやこれにしては「コマのくずフィルムも残存してはいない旨の誓約書——それをむこうがちゃんと作製して持ってきた。——に製作局長としてサインさせられた。

私はあまりためらわずにこの誓約書にサインしたが、それはこの時は嘘をつくことの方が良心的だと信じたからであつた。実は、私たち直接この映画の製作の責めに任じたものは、これを米軍が没収して、日本から跡形もなく持ち去ることなどどうしても承服できなかった。それは、米軍のもう一つの野蛮な犯罪行為だと思つた。それを何としてでも日本に保存しておきたかつた。デューブ（複製）

を一本とつておけば完全である。が、新たに社内伝票を切つて、現像場でデューブを作ることには秘密裡には行えない。事はすぐに露見せざるを得ない。そこで私たちは、編集や録音のためにすでに焼いてあつたラッシュ・プリントを一部いひそかに保存するというに手を着けるとのえた。極秘にするためには、できる限り少数の手で処理することがかんじんである。私たちは連判状をこしらへ、秘密を守ることにした。

私、加納君、伊藤君、それに進行のデスクにいた松田良雄君、この四人が連判状に署名捺印した。今度は本場に守る気でサインしたのである。そして四人とも

私たちが完成した映画を残しておくことができなかった。ただふたたびそれを復元できるような材料を残すことができただけである。

だから、どうしても、もう一度それを作り、ワシントンに密封されているのと同じものを、今度は日本版で完成し、これを日本中に、そして世界中に、公開することが私たちの新しい義務となつてきた。

ところが、私たち四人の同志は、一九五二年には、みなそれぞれの事情で日本

を本場に守つた。この時から、一九五二年、サンフランシスコ条約によって占領時代が終り日本が形式的に独立国となるまで、六年間、隠されたフィルムは、原子爆弾の秘密をいだいたまま、東京の一角のある現像所へ安全にたくわえられた。私たちはこうして私たちの原爆記録映画を日本に何と

かして保存しておくという重大な責めをはたすことができた。



いまこそ公開のとき

一方、没収されてワシントンに送られた「原子爆弾の効果」は、国防省の金庫の中に厳重に密封されて、これを見た人は、原子力委員会と軍の首脳部などのごく限られた少数のみであつた。

映画社をやめて、別の場所です事をしていた。(松田君は、今は故人となつていゝ) 私たちのかくしておいたフィルムは占領時代が終つて、もはや秘密の必要がなくなつたので、日映(これもすでに改組されて日映新社となつていた)の手に移された。

その詳しいいきさつについては省略するが、私はそれを日映新社にゆだねることにした。

「一ヵ年以内、伊藤時忠君の編集によつて、復元製作して、公開すること」

という条件をつけた。日映新社もそれを了承した。新社はこのフィルムの一部をつかつて、一九五二年八月、「朝日ニュース」三大三号「原爆特集」を出し、ついで「原爆の長崎」を出した。それは全体の数十分の一にしかあたらぬわずかに二、三百フィートであつた。そして、それだけであつた。

日映新社は、一年以内はあろか、それから八年たつた今でも条件を実行しない。それがたんなる個人的な約束であるならば、それもいい。が、広島長崎の被災状況についての世界唯一——アメリカ国防省の金庫の中以外で——の实在プリントをことさらにそしてはしいままに死蔵し、人類の眼と良心とから遮断しておくことは許されぬ。それはすでに犯罪だといつていい。

私はこの経緯を八月十三日の「朝日新聞」の「声」欄に、「原爆記録映画の公開を望む」という見出しで投書した。この投書の趣旨はさういふに世の多くの人の共鳴と支持を得ることができ、そこからいまこの公開を實際に促進するための新しい動きも生れようとしてゐる。この動きがどう発展し、実現するか、そして私たちのささやかな努力が、十五年を経て、むくいられることになるか、それについてはまた他日記者に御報告する機会があると信じてゐる。

（筆者は映画評論家）